NEURON

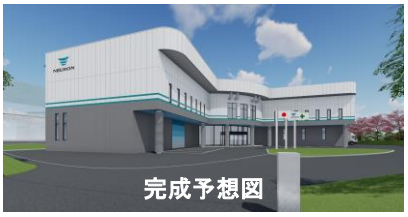
管路防災研究所
NEURON Pipeline Resilience Laboratory

NEWS LETTER

Vol. 3　　2022.5

企業の研究所に求められるもの

管路防災研究所　シニアフェロー　小池　武



〒619-0237
京都府相楽郡精華町光台2-2-5
日本ニューロン株式会社
けいはんなサウスラボ
『管路防災研究所』

お問い合わせ先
info@neuron.ne.jp

研究所の役割

伸縮可撓継手のメーカーに何故管路防災研究所が必要なのか、その目的意識が明確でなければならない。

従来製品の改良だけなら、現場経験から新しい解決策が見つかる。研究開発が必要なのは、解決したい根本的な課題が明確で、その解決に意欲を燃やす技術者がいる場合である。

企業研究所が大学と異なる利点は、隣接する現場で問題が把握でき、問題解決の試行錯誤がやり易い点にある。

最終目標が新製品という形で具体化でき、その成果が客先という最も手厳しい批評家に晒されていることで、実用に耐える新製品が思いがけずに早く開発されることがある。

研究技術者に求められるもの

有能な研究技術者とはどのような人材か、そんな人材を如何に育成するか。これは研究所の基本的課題である。

人は研究開発成功体験が累積することで、一人前の研究技術者に育ってゆく。 問題点を見つけ開発目標に達するまでの道筋は自分一人で描かねばならない。すなわち、開発目標が明確化する迄が大仕事で、その先は外部支援も得られ最終目標まで到達の道筋は見えてくる。

研究技術者は、何かに直面した時、自分流の独自のアプローチで徹底的に問題解決に食らいつき悪戦苦闘することができるタイプの人間が適任である。拘りを持ってしつこく問題点から目を離さない性格の人は、最適な人材ではなかろうか。

思いがけないアイデアは、孤独な中で生まれるとは限らない。もしその研究技術者が常に頭の片隅に課題探求心を持ちながら、仲間の研究者と議論したり自分の研究手法を他者に説明したりする会話の瞬間に、ある素晴らしいアイデアが頭の中に宿って来ることがあり得る。

実験装置に拘った手法で研究するのではない。必要な実験装置はその都度自分で作るしかないと思うことが大切である。

研究開発成果の形

開発成果の形はさまざまである。新製品、特許、技術論文など、その時々の業態に応じた形式で開発成果を世の中に問うことができる。研究技術者が成果を挙げ続けるには、成果発表の瞬間の醍醐味をまた味わいたいと思わせることであり、そのような人材が多く輩出できると、研究所としての存在意義が世の中に認知されるようになる。